

古本の妻安西均

ちょうど十年まえの夏だ。私が自分の書いたものを初めて出版したのは。

朝日新聞の学芸部記者だった私は、ある出版社から、学芸部記者というものの日常生活を織り込んだ読物を一冊書いてくれ、と依頼をうけていた。

いわゆる「記者もの」が氾濫しているときで、いまのようにテレビ・ドラマで「事件記者」という言葉が流布したり、週刊誌の続出で「トップ屋」という言葉が流行するには、まだちょっと早いころであったが——それでも出版界で「記者もの」といえば、なんととっても社会部記者の書いた本が圧倒的に多かった。学芸部とか文化部の記者というものは、新聞社の中でも地味な活動が多いから、本に書いても大受けするような話題に乏しい。

出版社からの話があって、かれこれ一年近くも私はうっち

ャっておいだ。どうも気乗りがしない。一つには同僚や先輩への気がねがあって、もっと適任者がいくらでもいる。

私なんか経験も浅いほうだ。それにまた、書くなら物笑いならないだけの、しっかりしたものを書きあげたい。出版界の「記者もの」流行に便乗して、アルバイトにやつつけ文章を集めたと思われたくない、いささかの見栄もあった。

ところが「その夏、突然に」——書こう／＼と思いい立った。動機は簡単。臨時に少しまとまったお金が欲しい。妻が病気になったのである。

暑い盛りの夜とか日曜日をつぶして、好きな酒を離れて、延べ二週間。本にして二百ページ近くの文集をまとめた。いま考えても、まったく冷や汗の出るようなお粗末である。出版社も急ピッチで印刷・製本にとりかかってくれた。

私にしてみれば、一年近く承知しないでいて、急に半月ぐら

いで書きあげたということが、何か後めたい気がするし、初めて自著を出版する喜びが心の底から湧いてこない。

私はこれを「随筆集」とよぶこともオコがましい気で、みずから「雑文集」と称した。

とにかく出来あがった。

寄贈した知人たちは、まあまあ私の初の書物ということで、お世辞半分の褒めこぼを寄せてくれ、欠点のほうにはおおむね目をつぶってくれた。

ところが運が悪いことに、その頃は版元のほうが経営不振に落ち込んでいて、かんじんの印税を、約束どおり私の手に渡せない。私も日ごろ小企業出版社の経営については事情を知っているし、また私の本を出してくれた社主の好人物な人柄も愛しているの、無理やり印税を取り立てる気にもなれない。

それでも背に腹は代えられない急ぎの金の工面が必要になったので、思いきって出版社を訪ねた。早朝であったが、社主のTさんは自分の書斎も編集室も兼用に行っている部屋の、デスクから三千円だけを取り出して渡してくれた。その後、再販もしたが、私が印税として受取った額は、後にも先にもこの三千円きりであった。

これは印税総額の何十分の一である。しかし私は、その後支払いの催促もしなかった。お金が欲しくないわけではない

が、版元は急速に経営困難の度を深めていったからである。

ゾッキという出版界用語がある。経営に行き詰まった出版社が、在庫品をダンピングで放出するのだ。今はあまり見かけなくなったが、都内のあちこちでそういう叩き売りにひとしい悲運の書物だけを専門に売っている店が幾つもあった。新刊書でありながら、十円とか十五円の値をつけられて、ごっそり店頭に並ぶのだ。

出版社がゾッキ本を出したとなると、みずから破産を宣言したようなものだ。出入の印刷所にも製本屋にも用紙店にも取引銀行にも信用はガタ落ちになる。それでも苦境の版元は少しでも現金化するために、泣きの涙で在庫品の叩き売りをしなければならぬ。

私の本も、ついにこのゾッキ本に出た。これは古本屋の棚で自分の本を見つけるよりも、数倍わびしいものだ。できることなら自分で代金を払って、買占めてしまいたいくらいである。が、十何冊、あるいは数十冊と積んである同じ本を買取ったら、店員はどんな顔をするだろう。まさか「これは、ぼくが書いた本だから」と名乗るわけにはいかない。忍術でも使って、自分の本をドロンと消したいくらい悲しさだ。

.....

ところが、本というものは恐ろしい。あれから十年経ったので、ゾッキ本の店からはとっくに姿を消してはいるが、ど

こかの古本屋に埃をかむって売れ残りがあるらしい。思いがけない土地の、見知らぬ人から、いまだに古本屋で買って読んだという手紙をもらうことがある。

うれいような、首を縮めたくなくなるような思ひだ。

私の本の中には、貧乏記者の家庭生活を書きとめた部分も幾つかあったが、古本で読んでくれた若い読者など、十年という歳月を無視して私の妻のイメージを抱いている人もあるらしい。つまり私も妻も白髪が目立ち、私の本も古本屋の棚

で十年の埃と手垢にまみれているのが現実なのに、本の中の妻だけが若々しく印象づけられるらしいのだ。こんな手紙が来たことがある。——「ぼくも詩を書いていきますので、あなたの四つの詩集と一つの編著は、出るたびに買って読みました。しかし、古本屋で偶然みつけたあなたの随筆集は、詩集にない感動を受けました。私はあなたのファンというよりもあなたの奥さんのほうを好きなのかも知れません」と。これはどういふことなのであろう。

新古今の美学 田尻嘉信

保元以来、戦乱が続き社会の秩序は乱れ、加えて地震、大

火、飢饉、疫病等災厄の頻発に世相は一段と不安の色を増した。そして平家の没落、源氏の抬頭と、世は次第に武家の支配を確立し、公家の衰退を如実に示した。この騷擾と栄枯盛衰の相が濁悪末世の感を深め、無常観を誘った。公家にとって不如意の憂愁が心に刻む傷痕の深きは、やがて王朝の風雅の伝統に支えを求めさせ、現実の儚さの外に在るべきひとつ

の相を教えたのである。

新古今集が、建仁元年十一月の院宣以来、前後四年の歳月を費して撰進されたのは、元久二年三月二十六日であった。

その夜、宮中春日殿に催された競宴で、後鳥羽院は、

いそのかみ古きを今にならべ来し昔の跡をまたたずねつ

と述懐され、建久九年、土御門天皇に讓位後、自ら歌壇を主